

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第 50号 2002.6.1

発行
北海道ポーランド文化協会
〒060-0052
札幌市中央区南2東2
河合楽器製作所北海道支社
電話 011-231-8661
FAX 011-221-4936

知られざるポーランド(3)

小原 雅俊

ポーランドへの旅はおのずと闇に没した過去への遡行の旅とならざるをえない。

多分まだ六〇年代末だったと思うが、ポーランドの友人や数人の当時の日本人留学生仲間とともにポーランドの南東部、ベスキト山脈の一部をなすピエシチャディ山地(ポーランド領に属す西ピエシチャディ山地)を夏の休暇を利用して歩き回ったことがある。ウクライナの領土に潜り込んだような、東部国境で唯一自然国境をなしているこの一帯は、サン川が作る湿地帯にポーランドでは珍しく鬱蒼と下草が生い茂り、その緑の横溢に日本にいるかのような懐かしさを感じたものだった。そこから西へ向かったのだったろうか。西の南端にはスロヴァキアとの国境をなす千メートル級の山々が聳えているが、その山あいのなだらかな坂道を、周囲を放置された果樹園に囲まれて点在する、かつて裕福な生業を紡いでいたことを推測させる家屋跡を左

右に見て、一体いつになったら人家にたどり着けるかと不安に駆られながら黙々と歩き続けたのを覚えている。地図には名前が載っているのだが、住民ゼロの村々が戦後長らく、いたるところにあった地域である。

当時すでに政府が補助金や長期の税の免除といった優遇策によって入植を奨励していたが、目に見える成果がまだ現われていない、という話だった。今でも狼が出没するらしい奥深い森が連なるこの一帯では入植が始まったばかりの頃は外出するとき、神父さんでさえ銃を手放せなかったそう。

ウルシヤワのスタレ・ミヤスト(旧市街)への入り口、王城広場手前の陸橋下からヴィスワ河とは反対の方角に伸びる「連帯大通り」が社会主義時代には「シヴィエルチェフスキ將軍大通り」だったことを覚えておられるだろうか。この將軍が戦死したのがここ、ピエシチャディ山

地で戦後ポーランド軍との間で繰り広げられたウクライナ蜂起軍(UPA)及び戦時中の対独抵抗の中心的な組織でロンドン亡命政府の指令のもとウルシヤワ蜂起を起こした「国内軍」の残党との戦闘でのことだった。ポーランド軍も蜂起軍も虱潰しに敵を殲滅させる作戦を取ったことはよく知られている。しかもこの「内戦」は散発的なものも含めると戦後すぐから一九五六年まで続き、この間にこの地域の住民のほとんどが村落ごと姿を消したのだった。また、政府と軍は一九四七年、ウクライナ蜂起軍を壊滅させた後、ポーランド南東部(ジェシユフ県、ルブリン県、クラクフ県)のウクライナ人及びレムキ人の住民十四万人余りをポーランド北部や西部の県に強制移住させた。今日、「歴史の見直し」の対象となっている戦後史の「闇」のひとつ、いわゆる「ヴィスワ作戦」である。

ポーランド語の語彙をスロヴァキア語の文法で話しているような不思議なポーランド語で、納屋の屋根裏にある干草置き場に宿を提供し、薄暗い土間の木桶からすくってご馳走してくれたシヤドゥウエ・ムレコ(凝乳)―この辺りの結構強い夏の陽射しの中を歩き続けて乾いた喉に



1988年のハシド（敬虔なユダヤ教徒）の人々の風景

は最高の美味だった。私がシシャドウウエ・ムレコを飲むようになったのはこのときのことだーとUFOの形をした、大きな、裏に麦藁が混じった素朴な自家製パンの味は今でも忘れられない。

本題に入ろう。このビェシチャディ山地の気ままなハイキングはマゾフシエ地方の寂しい風景とは別の豊穡な自然とそこに刻まれた痕跡からかろうじて読み取れる、つい十数年前までこの地で繰り広げられていた苛酷な歴史と対面する機会であったが、当時はいまいひとつ理解出来なかった風景もある。この辺りのなだらかな山腹では牛の放牧が行われていたが、そんな放牧地の中に牛の糞にまみれて墓石らしきものが散在する光景である。ヘブライ文字が書き付けられた墓石はかつてこの地にもユダヤ人共同体があり、その住人たちがそこで繰り広げられていた暮らしともども消え失せたことの証なのだ。今でこそ、この牛の糞にまみれた墓石が語りかけるものが少しは分かるが、当時、それはどこか奇妙な印象を残したに過ぎなかった。

イェドヴァブネはポーランドを占領していたソ連軍がナチス・ドイツ軍の侵攻の前に、ポーランド領から撤退する時に起きた。地元では今も事実を認めることを拒み続ける人が

多数を占めているようだが、この事件が歴史の時間軸と空間軸が交わったところで生じた、おそらく数少ない出来事のひとつであることは間違いないだろう。しかし、時間の軸を遡り、空間の軸を辿ってみれば、イェドヴァブネの出来事はポーランドのどこで起こっても不思議でないことが問題なのだ。

一九世紀半ばに膨大な数の作品を残し、今も読み継がれている作家ユゼフ・イグナツイ・クラシエフスキがとあるところで書いたように「どの町をもポーランドの町にしているものが何かお分かりだろうか。ユダヤ人だ。ユダヤ人が欠けることになると、我々は全くの異国に乗り入れることになり、彼らがいること、その貢献に慣れた我々には何かが足りないよう、気がする」のであり、ウクライナのヴィテプスクに生まれ育ったシャガールの絵の中に甦った理想化されたシユテトルへの郷愁と「ユダヤ人のいない」現実との間の歴史の残酷さを尚いっそう思うのである。ひよっとすると、一九八八年、最初のインティファダが始まる直前に撮ったハシドの人々がエルサレムに再現した東ヨーロッパの「ゲット」の風景がまだワルシャワの一角で見られたかも知れないのである。

〈完〉

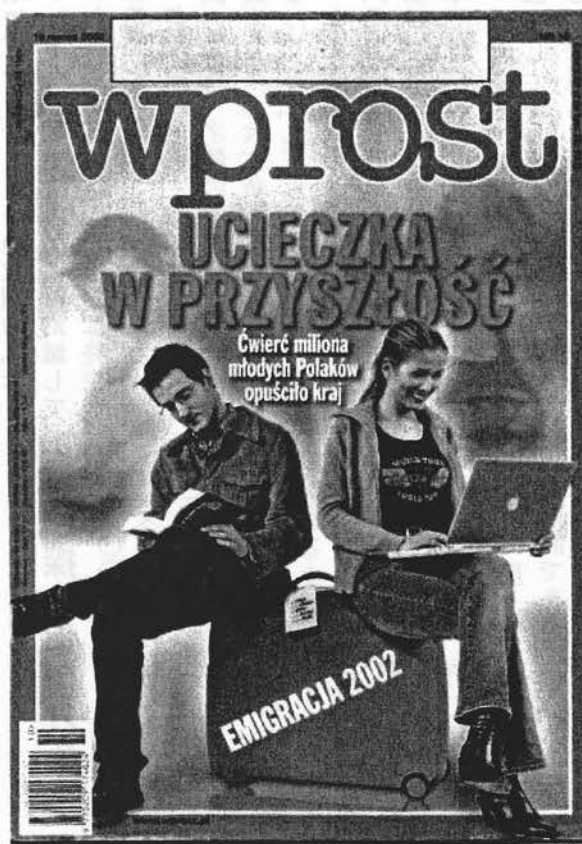
（こはら・まさとし）

東京外国語大学外国語学部

若者が、つぎつぎとそのシステムに飲み込まれ順応していく。以前と同様、医者は週七二時間労働を強いられ、学者や警官はほとんど失業手当てなみの給料しか手にできない、そんな「新生ポーランド」に裏切られた若者は、社会に直接的に関わりを断つことを拒絶するか、国外へと逃亡する。これをこの記事の著者は若者たちの自衛行為と呼んでいる。その原因を国の学問に対する軽視としている。なぜなら学術研究に対する国の予算は毎年二四%ずつ削減され、研究活動に携わる者の多くが国外へと流れているという。そのことが国全体の活力を奪っているというのである。学者らしい我田引水的な結論と見えなくもない。

変化に対応できず

しかし現在の失業問題の特徴を考えると、それもあながち的外れではないだろう。というのも現在のポーランドの就職市場ではつぎのような現象が起こっている。つまり社会の新しい変化に応じて生み出された新しい職場は、それに見合った新しい知識や能力が要求される。しかし失業者の中にはその条件を満たすものがない。つまり需要と供給がボタンの掛け違いのような状態になって



国外への移住者数を伝える「フ・プロスト」誌

いるのである。労働局の試算によると昨年、志願者が見つからなかったポストが二〇万件にも昇るといふ。その一方で二年以上も職の見つからない人の数が昨年は七〇万人以上にも達していた。

つまりこの知識人の空洞化は「亡命」と呼ぶに足るほど十分政治的である。ポーランドではこれを「手でなく足による投票行為」と呼んでいる。ヤギェウオ大学の国文科を卒業した筆者の友人も、国語教師の安月給にうんざりしアメリカへ渡り、ホテルでポーターをしている。ポーラ

ンドからの留学生達も滞在期間を延長し続けている。

先に紹介した「フ・プロスト」誌は結論として、「現在のポーランドが、国を変える運命にある若者達がそこに住むことを望まないような国であるというシグナルを、亡命者達は西側の投資家に発しているのだ」という否定的な見解を示している。

亡命と帰国の伝統

はたしてそうだろうか。優秀な若者達が国外で活躍することこそ、国

の威信を高めることになりはしないだろうか。冒頭で述べた「大亡命」の時代、才能あふれるポーランド人が湧き出るように西側に到着した。彼らを見て、このような人材をつぎつぎと送り込むポーランドが、分割後も決して滅びていないことを西側の人間は確信したという。芸術の分野は言うに及ばず、オーストラリアを探検したパヴェウ・シュチュシエレッツキ、カナダの建築家カシミール・グゾフスキ、ペルーに鉄道を引いたアーネスト・マリノフスキなど歴史に名をとどめているポーランド人亡命者は枚挙にいとまがない。二〇世紀最大のフランス詩人ギヨーム・アポリネールもポーランド人亡命者の血を引くひとりである。イギリスのポーランド史家ノーマン・デイヴィスは著書の中でポーランド人による亡命の特徴として、亡命後も祖国と絶えずコンタクトを持つこと、そして最後には結局帰国することを挙げている。もし現在国を捨てようとしている若者がいつの日か本当に祖国に帰ってくるとしたなら、「大亡命」の精神は、二一世紀のポーランドにおいてもまだ消え去ってはいないと言えるのではないだろうか。

(さみつ・しんいち)

北海道大学文学研究科博士課程

ポーランド国立民族舞踊団

“ŚLASK”

世界を席巻させたフォークロアの最高峰「シュロンスク」待望の初来日!

THE POLISH ŚLASK FOLK ENSEMBLE



2002年9月26日(木)

(昼の部) 開場13:30 開演14:00 / (夜の部) 開場18:00 開演18:30

江別市民会館 大ホール 全席指定 前売 ¥5,000 / 当日 ¥5,500

主催：北海道公演実行委員会
 後援：江別市教育委員会 北海道フォークダンス連合会 ポーランド共和国大使館
 (社)日本フォークダンス連盟
 協賛：チャコット株式会社 北海道ポーランド文化協会
 チケットのお申込み・お問合せ先：北海道公演実行委員会 TEL・FAX 011-811-8445

ポーランド国立民族舞踊団 「シロンスク」公演

初来日となるポーランド国立民族舞踊団「シロンスク」の公演が、九月二六日(木曜日)に江別市民会館で開催されます。昼の部と夜の部があります。詳細は、同封のチラシをご覧ください。

♪♪ ピアノコンサート

♪♪ 九月二八日に開催

本年度から新たな事業としてピアノコンサートを開催することになりました。従来は総会で行っていたピアノ演奏を独立させ、北海道ポーランド文化協会の存在をアピールする催しとして今後、恒例化する計画です。

コンサート企画運営係が開催会場など様々な条件を検討した結果、一回目のコンサートは次のように概要が決まりました。

- 日 時：九月二八日(土) 午後三時から約六〇分
- 会 場：道立近代美術館ロビー (中央区北一条西十七丁目)
- 内 容：ポーランド時代のシヨパンの作品数曲について解説と演奏
- 入場料：無料

ピアノを含めて会場を貸していた道立近代美術館との共催の形になります。出演者や具体的な曲目についてはあらためてお知らせしますので、お誘いあわせの上、ご来場ください。

本年度の事業計画が決まる

女性センター（参加者一五名）
③ 第四四回例会 ポーランド旅行八月三〇日〜九月八日（木）（参加者一三名）

本年度の総会が二〇〇一年十一月三〇日（金）午後六時半より、かでの2・7で行われました。

総会

会長挨拶 会長 谷本一之

1 二〇〇〇・〇一年度年度事業および決算報告、監査報告

2 二〇〇一・〇二年度事業計画（案）と予算（案）

3 会則改正について

4 二〇〇一・〇二年度役員（案）について

5 創立十五周年記念誌について

6 その他

懇親会
開会挨拶と乾杯 会長 谷本一之
ポーランド旅行報告 司会 小笠原昭子
ポーランド旅行ビデオ上映
閉会の挨拶

乾杯 - Stolat 栗原朋友子

1 二〇〇〇・〇一年度の事業報告

① 第四二回例会 ポーランド料理を楽しむ会三月三十一日（土）女性センター（参加者二三名）

② 第四三回例会「パンタデウシユ物語」講演会六月十四日（木）

日〜九月八日（木）（参加者一三名）

④ ポーレ発行 第四七号（二月十五日）第四八号（六月一日）第四九号（十月十五日）計三回

⑤ 総会 十月三日（すみれホテル）

⑥ 運営委員会 二月二日、九月二〇日

2 二〇〇〇・〇一年度決算報告・監査報告

当協会二〇〇〇・〇一年度の会計処理について監査実施の報告（下表のとおり）

3 二〇〇一・〇二年度の事業計画および予算

① 主催事業 ピアノコンサート

② 後援事業 音楽会、展覧会、映画会などを適宜行う

③ ポーランド語講習会（希望により随時行う）

④ その他

会誌ポーレ発行（二回）・総会二〇〇二年十月頃・運営委員会（二回）・十五周年記念誌発行

4 会則改正について
会則第六条「役員の任期は二

会費のお支払いはお済みですか？

《会費振込銀行口座》
北洋銀行大通支店（普）301-0605084
北海道ポーランド文化協会
事務局 小笠原正明
《郵便振替口座》
02740・5・19735
北海道ポーランド文化協会

年とする」を「役員の任期は一年とする」に変更

5 二〇〇〇・〇一年度役員について（二年任期）

（会長）谷本一之
（副会長）遠藤道子
（運営委員）

安藤 厚・安藤むつみ・薄井豊美
小笠原昭子・柏倉涼子・小林暁子
斎田道子・佐光伸一・佐々木保子
霜田千代 磨・小林美保・中島洋
灰谷慶三・本間富雄・三浦 洋
吉野悦雄・渡辺 卓

（ポーレ編集委員）安藤むつみ・小笠原正明・柏倉涼子・小林美保・佐光伸一・三浦 洋

（監査委員）富山信夫・吉田 宏
（事務局長）小笠原正明
（コンサート企画運営係）

國谷聖香・小林美保・本田真紀子
ウイリアム美由紀・安藤むつみ

6 創立十五周年記念誌について
灰谷慶三編集委員長を中心に進める

「ポーレ」編集委員会
安藤むつみ・小笠原正明
柏倉涼子・小林美保
佐光伸一・三浦 洋

011・386・3405
〔連絡先〕 小笠原

⇒ 二〇〇〇・〇一年度会計決算書

【収入の部】	予 算	決 算	内 訳	単 位：円
会 費	500,000	432,050	会費全額の66%、郵便振替払出料差引後	
その他	1,000	30,419	銀行利息、寄付	
小 計	501,000	462,469		
繰越金	237,507	237,507		
合 計	738,507	699,976		
【支出の部】	予 算	決 算	内 訳	単 位：円
事業費	340,000	178,563	例会: 26,348 総会: 98,480 語学講習会: 53,735	
連絡費	100,000	59,700	ポーレ発送、はがき・切手他	
編集費	40,000	28,232	ポーレ制作費、原稿料他	
会合費	30,000	15,120	運営委員会他	
事務費	190,000	188,313	人件費、事務用品	
予備費	38,507	46,305	封筒、書籍	
小 計	738,507	516,233		
繰越金	0	183,743	銀行預金: 495 郵便局: 98,560 現金: 84,688	
合 計	738,507	699,976		

POLE 第 50 号(2002.6.1) 目次

小原雅俊「知られざるポーランド(3)」	1
佐光伸一「21 世紀の亡命者たち」	3
ポーランド国立民族舞踊団シロンスク公演(2002.9.26)、ピアノコンサート(道立近代美術館、2002.9.28) のお知らせ	5
第 15 回総会(2001.11.30) 報告	6